



産地を席卷した村田式織機
織都を支え、現在も稼働

村田式織機

桐生の機械金属工業の歴史をたどると、突出した存在として「桐生機械株式会社」と「村田鉄工所」の2社に行き当たる。前原準一郎氏が創立した桐生製作所（後の桐生機械）は、金箄から始まり、織物準備機の撚糸機、整経機、管巻機などを製造。一方、初代村田兵作氏が設立した村田鉄工所はジャカードの製作から鉄製力織機を製造し、桐生の機械金属工業の曙を築いた。

村田氏は明治元年（1868）に新潟県刈羽郡に生まれ、22歳で桐生の地を踏み日本織物株式会社に入社した。ここで機械技術を学び、同社を一年余で辞めてジャカード製造に取り組んだ。同28年（1895）には村田鉄工所を創業、管巻機や整経機、繰返機の改良に成功。同40年頃からは力織機の研究に着手、大正2年（1913）に桐生における力織機の第一号機「村田式力織機」を完成させた。

これは鉄製で四種類の緯糸（よこいと）を交互に織物に打ち込める四丁杼（よんちようび）力織機であり、画期的な機能を持っていた。同3年（1914）に東京で開催された大正博覧会、同7年（1918）に足利で開催された全国染織機械に出品して高い評価を受けた。同10年（1921）に工場を西桐生駅前に移転、従業員約80人を擁す織機専門メーカーとなった。

昭和10年（1935）調査では、桐生産地の鉄製力織機10,255台のうち村田式織機は2,759台、27パーセントを占めている。昭和初期の恐慌、不況期を乗り越え稼働した村田式力織機、日本を代表する織機として当時の工業高校の教科書に掲載されたという。

村田兵作の名は二代、三代と受け継ぎ襲名され、社名も村田機械製作所から村田工業となり、現在は太田市由良の工場ディーゼルエンジン用の燃料噴射ポンプを中心とした自動車関連部品を製造している。現在の会長は村田陽一郎氏、社長は村田光繁氏である。

菱町の撈上織物、ノコギリ屋根の工場内では村田式織機が現役で稼働している。代表の撈上喜一さんは「とても優秀な機械」と太鼓判を押す。部品もなく機械の摩耗も進んでいるため大切に手入れをされながらの稼働である。桐生の機械金属工業の礎を築いた歴史的な名機、産業遺産とも言える後世に残すべき織機である。

（写真は撈上織物工場内で稼働中の村田式織機）